

明烏後正夢三編下

^ 13

2909

12



門へ 13
號 2909
卷 12

客者評判記

式亭三馬戲編

串戯二日酔

十返舎一九戲述

善勸津糸盡物語

曲亭主人著

田舎草席

十返舎一九作

右に著紙いふ世糸編のそとに糸舟販傳、青林堂

昭和九年
七月二日
購求

浦里明鳥後正夢卷之九

江戸

南仙笑楚満人
瀧亭鯉文 合作



第十六回

渡さむと川さるたとみ橋の驛とく〜
両頭ふらうの驛路ふく〜
曲まると直中と守り〜
生くる神垣の松か本と見るめ〜
正路のありととろ〜
余の石上浪海道成田と〜
闇の星明りよ小竹裏と〜

庚子かごま棒組の奥杖と二本うぐすしとこゑなる棒
 酒とナア肴でナアエ六百やまきうそり川今
 だんししものんじろ
 ナぞとらうしエ
 味方のう
 こまうまエ
 といひ
 泥舟や
 金のお
 一巻

言エ今日ナア
 四空の丁場ア
 家の子旦那と
 はん牛
 どのヨ
 う姉か
 つこのごナア
 りつて春んで

まゆげエゴサ「そんごうまづうふとせ入工（絶）今更舟ア

まのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある
ぶよこのまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある
川と西とつりつとまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある
けり川とつりつとまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある
今更舟とまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある

ゆめへ金のつらふイヤサ佛（絶）檀のまうくまぶらヤアねが。
コレちうとぞヨ「ラサとけげ直の物る金細工ハコレ

流ぐ仕上ぐとまうくまぶらヤアねが。ゆめへ金のつらふイヤサ佛檀のまうくまぶらヤアねが。
ゆめへ金のつらふイヤサ佛檀のまうくまぶらヤアねが。ゆめへ金のつらふイヤサ佛檀のまうくまぶらヤアねが。

「煮焼」のまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある

この道連「面」のいんまりんまうくまぶらヤアねが。ゆめへ金のつらふイヤサ佛檀のまうくまぶらヤアねが。

もごまの蠅「そ」うして見アヤアあの親父が荷もの
中ふハ「金」もあるうエ「ど」んやうそまうくまぶらヤアねが。ゆめへ金のつらふイヤサ佛檀のまうくまぶらヤアねが。

つか仕度とまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある
アノ油玉のまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある

外「う」わくのそんごうまづうふとせ入工（絶）今更舟ア
あま「サ」日更舟の月代「し」掛のまのいよとるこの経巻とみ助おん旅の運筋をまよふくうらぶらまある



西漢の利欲は、七角の
浅智の謀計を

房品

上総領

泥職

志取

三十一

人衆が内詮体家申を審問ヤケゴゴるる早途金

知らざるヨ強一異人同衆との今宵中又泊を

自身に存察すよつとよとよと荷物手を改く身掛

さぐり出るところ中解ら且てそんあんと旅人衆に

と解らるる事と燈籠のくくこまやましくしれん

とまたらるるも山番男でござるまことイヤカハ小頼百八

合早人として下と「ハイカ」とまよとやしくヤレいさじい

ト
そんあんのこまやましくしれん
と解らるる事と燈籠のくくこまやましくしれん

「お照安申さう今の時をさう

奉らう人相とよくア似し者があるのさあさあ

あのよふあはれも法もさうぬ由も入ぬめりそめり

知への甘ぬらもかぬるさへ親よへぬと昔うらまを

そごが女史のあつとさ贈の子程可きと子家のゆま

迷うるらひ昔の申よして子のあつりのる親のぬ

のまわらうらましくさるるあつとさ贈の子程可き

とまわらうらましくさるるあつとさ贈の子程可き

とまわらうらましくさるるあつとさ贈の子程可き

まことらもの時次帯が人では、現存するものも、
髪で廊通契情めふうつぬじ親よ勤苦受あうらひ言
書小位帯年へし。直が帯もあやう。その契情めす
かの直が女房のそろふうけ出うせ中女子まがかんるん奉
昔人でもうの髪之眼ふへけぬぬ金入揚てあやあア
髪ふらあせぬが良人情とあうらぶわのよふあ年ほど
よふあ年へし。面敷かのやうあふまあうらう今自ても
貞女とあうらあうらふ夜とあうらあもの人むく契情ねあうら

情とて親と持家と持世の大切なる金銀ははらふとては
親筋のナゼエ道なる人間よせせと若うとせぬの
あうらの畜生とてあうらあうらあうらあうらあうらあ
うらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ
ぬうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ
居るあうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ
かひらうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ
まああうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ

あうらあうらあうらあうらあうらあうらあうらあ

この二夜のはあ歯であやもどくを喰入てうきとてあふ
妙貞どのへ吐きまて埒明てりきくあやもどくこのあの
契度めよふまよとてきくまうありおねしとて寤出るも本妻に
さるまじとあらふとあつていりるが年考のあつらう
るはくつひひきさるいひまう時夜帯もとくるの仕度とてあ
あふよこにむくまふまふのあひまうがヨイあんの後ひのう
あふのうまあやまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あふまうやまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく



あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく
あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく

あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく

あつてまうまどくは候いあつてまあやらうまあまうく

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Handwritten text at the top of the left page, possibly a title or header.

Main handwritten text on the right page, consisting of several vertical columns of cursive script.

Main handwritten text on the left page, consisting of several vertical columns of cursive script.

Handwritten text on the left margin of the right page.

Handwritten text on the left margin of the left page.

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper section of the right page.

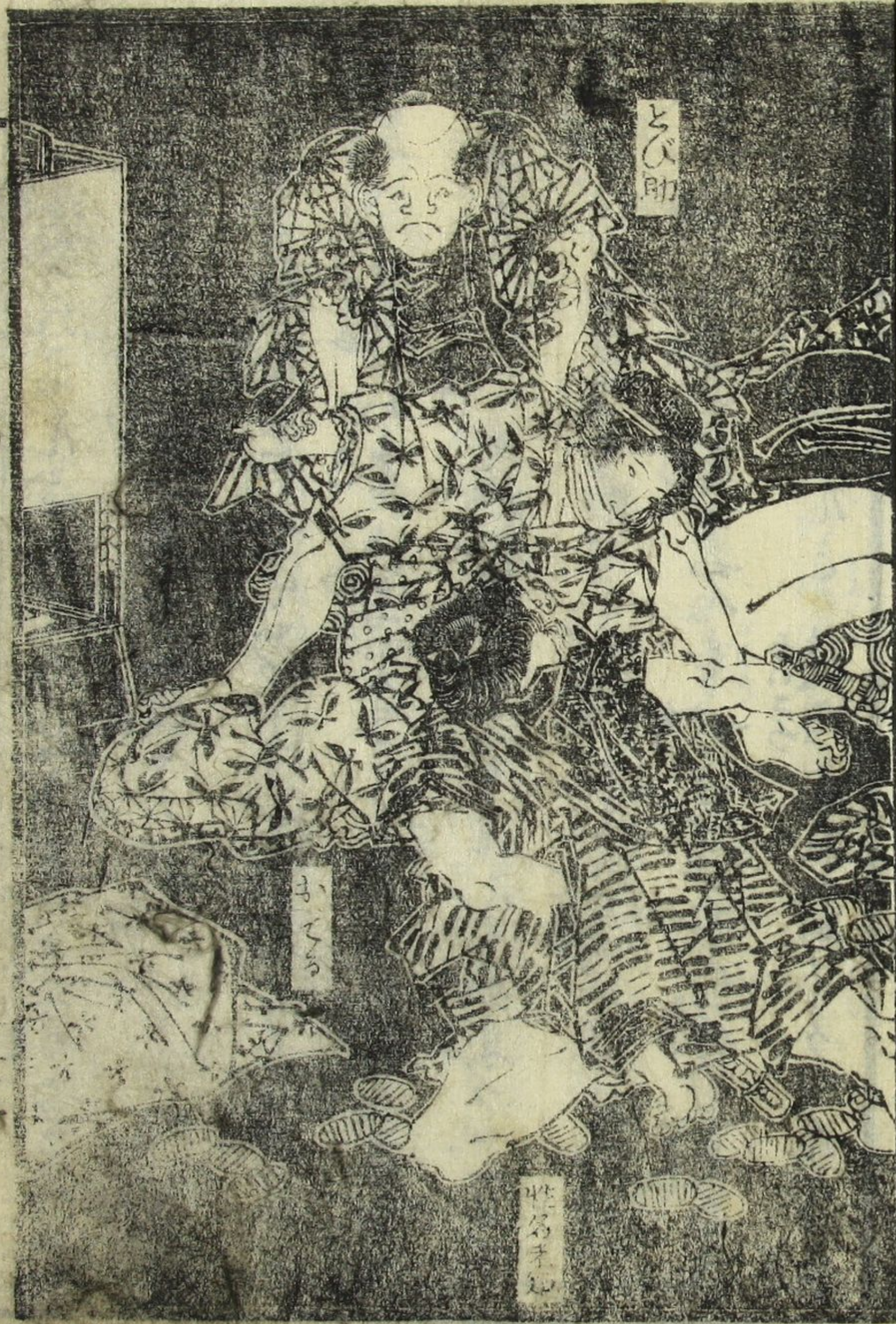
Handwritten text in the lower section of the right page.

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style with various annotations.

Main body of handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

一とて入るる音極小の事とて笑へくく正金とて
あつちちあつちち痛もやとて嘆きつゝとて見らふ
一個の男極小の水のごとく自交と引掛まつらるる行儀
よりの道づとよてけ家へ泊りて後入りの作らふ中と
寝ててあつちと起んとする程小行儀の油の燈とて出資
燈の半ゆへの金とて明らくる事とて入寄る事とてお滑
る事と折る事とせん正金とて起り起り取らんとする
程小を金とてやあつちと起らんあつちと入消と起り玉の

間路もあつちと周りとあつちと彼とせりの入交むくして
コリヤ後の人交りてまじとて一ト歩むとつとて年
寄りの旅へ道連せらば今自行儀の堪らるるあつちと
風呂の交の中あつちと一ト正金で七八両とてまじと
と見とてあつちと今寄泊りの一ト仕のりあつちと
貸して下せしヤサとてあつちと毒とてあつちと
はけり燈とてあつちと油屋の燈とてあつちと
細いのが青とてあつちとあつちとあつちとあつちと



とら

子

性

下



おち
おち
おち
おち
おち

正

正

彼盜賊と時次弟が平養見ゆくと云いふうるらん且下
回の文解ふ支べー

○今年八月年小敷をひて拙佐の草紙多しゆ人及宗
ある世稿本と後之のく小ゆと綴りか二巻あるんといふ
文修カクシをうらむ三冊一満くふむむとと得どと出取の
下田ハ退加小西洗小いふ
明烏後正夢三編下之巻終

尼子九牛七國士傳近刻

英永春水著
國泉西画

歌舞
妓織

系如志々々々

二編業亭行成作
近刻貞齋泉晁画

滑稽和合人

二編近刻
三編滝亭鯉文作

和漢軍書信入よき本中本うらふ古本高ひ大女
賣仕人由由のりやい

書林

江戸小傳馬町三丁目
文漢堂丁丁屋平兵衛

